

親鸞の菩提心観

曾我 円成

菩提心とは、一般に、悟りの智慧を得ようとする心を意味している。その菩提心は、大乘仏教が興起されて以来、特に重要視され、大乘菩薩道を歩む者の必ず最初に起こすべき心であると同時に、一切衆生を救おうとする心をも含むものであり、仏道を志す者の最初にして最も根本となる心であるといえるだろう。また、それは「菩提の根本」と説かれるように、仏道成就の根源とされるのである。

そして、菩提心を起こすこと、すなわち発菩提心行は、仏道における一切の行の最初に修する行として、さらに、土台となる必須の行として、時所を問わず、仏教者の中で大切にされていくのである。もちろん、このことは、浄土教の祖師達においても例外ではなかった。

ところが、この行について、それまでとは全く異なった了解を持ったのが、親鸞の師法然であった。

法然は、主著『選択集』において、本願の行として称名念仏を見出し、念仏往生の仏道を開顕する。また、それは「廢立」といわれるように、様々な行の中から称名一行を選び取り、それ以外の行を捨てることを意味している。そして、発菩提心も、選び取

りにもれる行の一つとされたのであった。

このような、発菩提心をも「余行」とするという法然の了解に、聖道門とされる仏教の側から、多くの論難が生じるのは当然といえるであろう。例えば明恵は、いわゆる『摧邪論』において、菩提心を仏道の正因とするという、仏教一般を代表する見解を示し、痛烈に法然を非難しているのである。

ところが、法然は『大経』三輩段の「一向専念無量寿仏」という教言に着目し、特にその中の「一向」という言葉が持つ、それ以外のものを兼ねない、という意義において、発菩提心をはじめとする諸行をすべて余行とし、それらを廢したのである。この法然の、仏願に順ずる行としての称名念仏に対し、発菩提心という行を廢すべきものとした、独自の菩提心了解の根底には、本願が一切衆生の救済をその内容とする限り、本願の行とは難行ではなく易行称名念仏であり、それ以外の行を必要としない、という往生浄土のための本願の行業についての了解があるのである。

このように法然は、菩提心を発菩提心行という視点で一貫して捉え、それを廢すべき難行であるとしたことが看取できるのである。

それでは、親鸞は菩提心についてどのような了解を持っていたのだろうか。親鸞が法然を「真宗興隆の太祖」と位置づけていたことは周知の通りであり、法然の菩提心に対する了解を踏襲したことはいうまでもない。しかし、親鸞の菩提心了解はそれにとどまるものではなかった。

法然の本願念仏の教説に出遇った親鸞は、自らが起こす菩提心を否定した。そして、自身に起こった信心を、自身が起こしたものでなく、如来の本願のはたらきによって発起したものと、親鸞

は自覚していくのである。

そして、親鸞は、このような信心の根源を尋ねていく歩みの中で、法然の菩提心了解をふまえつつ、「横超」という言葉で示される真宗の仏道における菩提心を、以下のように述べる。

横超者斯乃願力回向之信樂是曰願作仏心願作仏心即是横大菩提心是名横超金剛心也 (信巻) (定本)・一三三)

ここで、親鸞は、本願のはたらきによって獲得される信心の内容を、世親・曇鸞の思索を手がかりに「願作仏心」とし、それを他力の菩提心であるとする。さらに、それを善導の教示によって「横超の金剛心」である、とその性格を述べる。つまり、自身に発起した信心が菩提心としての意味を持つ、と説示しているのである。

しかし、この菩提心釈とほぼ同じ内容を示している、『唯信鈔文意』の記述に注意しなければならない。

この眞実信心を世親菩薩は、「願作仏心」とのたまえり。この信樂は、仏にならんとねがうともうすころなり。この願作仏心はすなわち度衆生心なり、この度衆生心ともうすは、すなわち衆生をして生死の大海をわたすころなり。この信樂は衆生をして無上涅槃にいたらしむ心なり。この心すなわち大菩提心なり、大慈大悲心なり。

(定親全)三・一七四―一七五)

ここで、親鸞は先の菩提心釈と同じく、信心を「願作仏心」とする。そして、その内容を「仏にならんとねがうともうすころ」と端的に述べる。これは信心の自覚的内容を意味していると考えられるだろう。しかし、ここでは、さらにそれを「度衆生心」に転釈する。親鸞は、この「度衆生心」の内容を、「衆生を

して生死の大海をわたすころ」・「衆生をして無上涅槃にいたらしむ心」と示す。つまり、度衆生心とは本願のはたらき、あるいは如来の願心そのものを表す言葉であるといえるのである。このことは、

度衆生心ということば 弥陀智願の回向なり

回向の信樂うるひとは 大般涅槃をさとるなり

(正像末和讃) (定親全)一・一六八)

という和讃においても確認することができる。ここでも「度衆生心」が「弥陀智願の回向」、つまり本願力のはたらきを示すものと述べられているのである。このように度衆生心の内容を確認した上で、親鸞はそれを「大菩提心」・「大慈大悲心」とする。すると、この大菩提心とは本願を起す根源となる法蔵菩薩の菩提心を指していると考えられるのではないだろうか。

法蔵菩薩は、速やかに正覚を成じ、衆生の様々な生死勤苦の本源を滅するといふ「無上正覚之心」、すなわち無上菩提心を発起し、そこから「無上殊勝之願」を発願した、と『大経』には説かれている。親鸞は、自身の信心をどこまでも深く推求する歩みの中で、ついに自身の信心の最も根源に、『大経』に説かれた、この法蔵菩薩の菩提心を見出したのではないだろうか。つまり、親鸞においての菩提心とは、信心の究極的根源を表していると理解することができるのである。

「豎」の仏道においては、まず発菩提心ということがあった。しかし、その自力の菩提心に問題があった以上、親鸞が見出した菩提心はそれとは質を異にするもののはずであろう。自らが起す菩提心によって「無量光明土に生まれんと欲する、これ必ず不可なり」という自覚にも拘わらず、「仏にならんとねがうともう

すところ」が衆生に生じるとすれば、それは他力によるものである。親鸞は、このような信心に対する了解の深まりによって、それを本願力の回向成就の信とする。そして、それをさらに根源化して、法蔵菩薩の菩提心をそこに見出したのである。

本願の名号

——本願為宗・名号为体——

竹原 了珠

親鸞は、一切衆生の上に仏道が開かれるのは、聞名、すなわち仏の名号との出会いを基点とすることを確かめている。この仏の名号を親鸞は「本願の名号」「ちかいの名号」「誓願の尊号」と述べているが、その表現は修飾的または説明的なものではなく、仏道を成就してゆくという名号の本質を凝縮して語っていると思われる。この「本願の名号」の本質を端的に表明しているのが、「是を以て如来の本願を説きて経の宗教とす。即ち仏の名号を以て経の体とする也」という言葉によって、「大経」の宗体を「本願の名号」と押さえて真実教を決定してゆく「教卷」である。ここに見られる宗体説は、經典解釈方法の一種である宗体説を依用し、具体的現実的に示教としての仏説にいかなる地点において出会うことができるのかを確認する意味を持つものと思われる。その意味で、親鸞にとって仏の正意を常に自己に確かめていく基点となったものが「本願為宗・名号为体」「本願の名号」であると考えられる。

宗・体説によって経を判定していくことは、七高僧の上では曇

鸞・道綽・善導の著作の中にも確認することができるが、先学によって特に曇鸞・善導の(宗)体説が親鸞の(本願為宗・名号为体)の背景として指摘されている。曇鸞・善導の(宗)体説は、宗・体それぞれが指し示す事柄は相違していながらも、(宗)体説によって表明される仏説に対する視点は観念的のものではなく、仏の滅後という現実を生きる衆生が、いかにして釈尊の教意に遇い仏道を実修しうるかを課題とする視点なのであって、両者の(宗)体説はその視点に基づくものである。

曇鸞の名号为体説は、『論註』巻上冒頭の難易二道判において、他力易行道による不退転地に到る願生浄土の道が世親の『浄土論』によって示されていることを述べ、その論題である『無量寿経優婆提舍』を釈明する題号釈のなかに、示されている。そこでは曇鸞の基本的視座、つまり無仏の時において仏教を明らかにするという課題が披瀝されている。そのことは難行・易行の二道判において、難行道が「難」であることは「五濁の世・無仏の時」ということの確かめをくぐって言われていること、また題号釈の中で、「優婆提舍」について「無仏」の時処において『無量寿経優婆提舍』なる「浄土論」は仏説、つまり経に比せられる位置づけがなされていることから知ることができる。曇鸞は、無仏の世であることを悲歎しつつ、無仏の世にありながら仏道を生きようとする存在として、どこに仏の教説を確かめていけるか、そしてどの地点において仏道が成就するのかを重要な課題として扱っていたのであり、無量寿仏の莊嚴功德を説く『無量寿経』の体が仏の名号であるとしたのも、念仏において無量寿仏の莊嚴功德に触れることによって仏道が現実的に開かれたことによるものであり、それ以外の立場ではない。曇鸞の名号为体説は、このよ